

「子育てについて考えてみましょう」

——かけがえのない日々を子ども達と過ごして——

園長 高杉美稚子



子ども達の2カ月から半年先の成長の姿を追いながら、カリキュラムを組んでいくという幼稚園の特性の為か、歳のせいかわ、最近は1年が、いえ10年が随分とはやく感じるようになりました。

4月からの日々過行く子ども達の成長が嬉しいそんな毎日です。

さて、入園されてから、幼稚園では、「幼児期は、体感する事で学び、行動する事で、思考する」という事を前提に、「その年齢に必要な適時適量の直接体感保育を通して、一人でも、そして皆と力をあわせて取り組もうとする心と頑張れる体を培う幼稚園」である事に務めてきました。

幼児期の直接体感保育がもたらす、「見る、聞く、話す、感じる体感保育の大切さ」は、百万語の言葉より説得力を持つ事はいくらでもありません。

数年前のことになりますが、そんな子ども達の育ちの姿を直接感じる事がありました。縄跳び大会あけのことです。お部屋に子ども達がやりとりした手紙が一通落ちていました。その手紙を拾った、担任が、涙を眼に一杯溜めながら、私に見せたくれたのでした。ただただ、感動でした。子ども達のその思いを抱きしめたい瞬間でした。保護者の方の了解を得て、掲載させて頂くことに致します。以下文章原文そのままです。

B子ちゃんからAちゃんへの手紙です。

「Aちゃん、B子ね、きのうないたでしょ。Aちゃんもないたよね。くやしいよね。それは、ないてもいいんだよ。それはね、おとうさんたちはよくがんばったってゆういみだよ。どうしてかってゆうとB子のおとうさんが、いったよ。ないてもいいって。だって、みんなはがんばろうって、こころとあたまでかんがえてんだよ、それでもまけたらしょうがないよ。Aちゃんもがんばろうとおもったでしょ。B子もがんばろうとおもったよ。くやしいけど、まけたひとは、みんななくよ、みんなはえらかったよ。みんなはすごかったよ。

Aちゃんもおなじだよ、でも、ゆうしょうしたひとも、30びょうとべたひと、30びょうとべなかつたひと、1ぶんかんとべたひと、1ぶんかんとべなかつたひと、みんなえらいよ。Aちゃんがんばったよ。ありがとう、Aちゃん。Aちゃん、B子はCしょうがっこうへいくかもしれない。それでもいいかな」

年長組の女の子の手紙です。いかがですか。何を感じられますか。縄跳び大会に向かって、一生懸命頑張った、でも負けてしまった、くやしかった、そして二人は泣いてしまった。その翌日の手紙です。

手紙の文章力のすごさもさることながら、**何という感受性が育っているのでしょうか。まず、つらい、悲しいことをつらい悲しいと感ずることができる力。そしてそれを素直に友だちにも親にも表現できる力。また、お父さんのアドバイスが素晴らしい。「泣く事は恥ずかしいことではない、泣いていいんだよ」としっかり、我が子のあるがままの姿を受容して下さり、更に「泣けたのは頑張った証である」と、B子ちゃんの枠組みの転換もして下さい、プラス思考で望んでおられます。**

そしてそのアドバイスを素直に受け取るB子ちゃん。泣いてもいいって自分が受容された後、そのことを納得したB子ちゃんは、お友だちにもそのことを伝えています。次に、頑張ろうと思ったそのことが素晴らしいことであること、負けた人も勝った人も同時に、等しく素晴らしかったとことを心と頭で感じ、理解しています。

私達大人は、ともすると毎日の雑用や仕事に追われ、小さな事への気づき、発見する力、感じる力を忘れて、いえ意図的にどこかへ押しやっているのかもしれない。そしてかえってそのことで、ただ、自分の気持ちに素直になればいい、感じたままを大切に、相手を傷つけないようにして、気持ちを素直に伝えることをすればいいのに、そこに理屈や言い訳やこじつけをつけて、本当の自分とは別の自分を作り上げて問題を



複雑にしているのかもしれませんが。そして、自分で本当の自分とは違うバリアーを作っておきながら、本当の自分はこうではない、本当の自分は理解をされていないと悩んでいたりします。

感じたあるがままの自分を大切にしないで、素直になれず、自分の気持と反対のことを言ったり、行動したり、うそを言ったり、かえって知らないうちに他人を、そして自分自身を傷つけているのかもしれませんが。だからこそ、素直な気持ちのこの手紙の中には、大人がはっとさせられる人として大切なものがつまっているのではないのでしょうか。

この手紙の最後にありがとうAちゃん。そして、別々の小学校にいくかもしれないけれど、これからも友だちでいようねという思いで締めくくられている、この理解しあえたAちゃんに「ありがとう」と感謝できる謙虚さ、素直さ、別れ行くせつなさへの言葉が更に感動的です。5歳児の感性の素晴らしさ、大人が推し量れない程に鋭いものがあります。いや5歳児だからこそその感性なのかもしれません。

年中長組になると、家庭や幼稚園での生活体験を通して、情緒面が発達するとともに、言語能力が格段と身についてきます。それは、私達大人以上の成長の早さであり、鋭い感性の豊かさを持っています。その意味では、次の音楽発表会や運動会でどんな体験をし、成長を子ども達が表現しようとしてくれるのかがとても楽しみです。

この心の育ちは、幼稚園だけで育てられるものではありません。一番は家庭教育、家庭生活が基盤となって、幼稚園での育ちとつながっていきます。

中野由美子先生も、幼稚園教育課程理解推進事業中央審議会の中で次のように述べています。
「本当の子育て支援は、親子が共に育つ為の環境作りである。親を育て、その親を支援者に育てていく事が大切である。子育てのつまずきを実感した親だからこそ悩んでいる親の支援者になれるのである。つまずきを学びにして、親子のボタンの掛け違いを直していく、親が子どもの育つ姿をしっかりと見て、声を聞いて、子どもが育つ姿を見て、親が子育てを楽しむ事が出来るようになり、子どもの育ちが豊かになる。だから、親は人に預けっぱなしをするのではなく、子どもの姿を知ることが大切である。そして子どもが、親と共に育って行く。これこそが、子育ての伝承である。」と。

園児達が成長し、この時期クラスの中で、それぞれに自分の考えを持ってくると、自分の思いを伝えたいという気持ちも強くなります。一人ひとり話を聞けば、素直な思いがあり、意地悪をしようという思いはなくても、お友だちの気持ちを受け止める前に、自分の思いが先になり、友だちとの折り合いをつけることが難しい段階も出てくるのがこの時期です。

成長しているからこそその人間関係も生まれてきます。「私はしていない!」「私はこの前我慢した!」など、それぞれが「私は私」の自分を持つという段階を超えるための体験の中で、悩んだり、傷つくこともあるかもしれない・・・必ず通る成長段階の葛藤の時期がやってきます。

幼稚園では、この時期にお友だち同士で、ありがとう・すごい・うれしい・一緒に遊ぼう・いいよ・かわいいなどの言われて嬉しい言葉、【フワフワ言葉】を使おう、いやだ・いやない・あっち行って などの【チクチク言葉】は使わないようにしましょう。

フワフワ言葉をたくさん使って、お友だちのことをもっともっと知って、仲良くなろう!など話し合っ子ども達で決めています。

そのような園や、家庭生活の体感教育の中で、小学校に向っていく時期に向けて、個人差はありますが、だんだんと、先の手紙のような豊かな感受性と、愛と思いやりがしっかりと育っていくのでしょう。

どうぞ、今一度、ご家庭でもこの園児達の園生活がさらに豊かになり、子ども達一人ひとりの心が育ってまいりますように、ご家庭での言葉かけと、お友だち同士の育ちあいを見守って応援して頂きますように、ご協力を宜しくお願い致します。

